

吐蕃王家の祖先

— sToṅ Lom ma tse の意味 —

山 口 瑞 鳳

はじめに

チベットの伝承によると、吐蕃王家の祖先は、Sroṅ btsan sgam po (=Khri sroṅ brtsan=Sroṅ lde brtsan 581—649)¹⁾ 王の前に31乃至33代を数える²⁾。概算で一世代を30年に数えると、その間900乃至1000年があったことになる。つまり、彼等は、紀元前四世紀からチベットの地に王家としての地位を保っていたということになる。常識的な見解にもとづいていうと、これは、七世紀にいたって漸く「吐蕃」国の体裁を完成する³⁾ 部族が、一王家としてたもちえた歴史的期間と考えるには余りにも長すぎる。この点に関して、従来、内外の学者の誰もが深く疑っていない⁴⁾ので、疑念の拠る所を示すと共に、筆者の所見を明らかにしたい。

I

吐蕃王家の第一祖 Ŋag (gÑa)⁵⁾ khri btsan po が Yar lha çam po、または、lHa ri gyañ do⁶⁾ に降臨して Dri gum btsan po (Gri gum btsan po/Khri guñ btsan po?)⁷⁾ に至るまでに七代を数えたという。彼等の拠ったところは、コンポの碑文に従えば、はじめから Phyin ba sTag rtse であったようにある⁸⁾が、Dri gum bstān po 以前の王については、その地に墓がなく、この説明の信憑性を著しく損ねている⁹⁾。しかし、敦煌史料の言うところ¹⁰⁾では、Dri gum btsan po の子、Ça khyi が lha btsan po¹¹⁾となり、sPu de guñ rgyal を称し、Phyin ba sTag rtse に拠ったと具体的に示されるので、これ以後の方はほぼ確実である。

Ça khyi の時にこの地にはじめて拠ったとしても、その時から Sroṅ btsan sgam po までには、大略800乃至900年が経過したことになる。敦煌史料には、Dri gum btsan po から sPu de guñ rgyal に至るくわしい説話のあとは、Sroṅ btsan sgam po の祖父 sTag bu sña gzigs に至るまでの間、どのような説話も伝えられていない¹²⁾。つまり、ほぼ700年相当の間が全くの空白なのである。従来の説明によれば、ここで突如として吐蕃王家興隆の発端が

見えたことになるのである。しかし、そのようなことが果してありうるだろうか。あまつさえ、Phyiñ ba sTag rtse を含む Yar luñ 地方¹³⁾ は、チベットでは一等地に属する。ここに拠った一地方豪族が、これ程長期にわたって他の侵犯をうけず、安泰であったと考えてよいであろうか。しかも、その間の伝承は全くの中抜けなのである。これらの点について、例えば、一時代前の我が国の古代史研究の場合などを参考にすれば、似通った事情が推測できるのではないであろうか。

敦煌出土の編年紀、王統紀、宰相記、年代記等¹⁴⁾ の原本は、おそらく、rBa bshed に伝えられる¹⁵⁾ とおり、Khri sron lde brtsan が mGos (Khri bzañ yab lag) の進言をいれて、mi chos 編纂事業を行った際に生れたものであろう。この頃、吐蕃は、軍事国家として完成した組織をもっており、その威信についての関心は通り一遍のものではなかった¹⁶⁾。そのような雰囲気の中で、王家の祖先を悠遠の彼方にまで遡らせ、他の諸氏族の祖先よりも特出した位置に据えることは、当然の措置とされていたに違いない。事実、この種の操作の跡が、敦煌文書の王統紀中に歴然と見られ、そのような意図の有無を今更詐議するまでもないことが知られる。

例えば、ペリオ・チベット文書1287の末尾¹⁷⁾に

sgyed po ḥog gzugs na/zañs rdo bla nas phab ste rje ru gçegso/bços na ni sPu de guñ rgyal/groñs na ni Grañ mo gnam bseḥ brtsig/ḥgreñ mgo nag gi rje/dud rñog chags kyi rkyen du gçegso/

炉を下に据えると、銅鉱石¹⁸⁾ が天より下り、王者となつた。名は改め¹⁹⁾て sPu de guñ rgyal (と称し)、住む²⁰⁾に「天の一角館²¹⁾」を築いた。(かくて)立ちあるく黒頭(人間)の王者、匍いあるく有鬣(馬)の飼主²²⁾となつた²³⁾。

とあるうちの第三、第四句が、同文書1286²⁴⁾ では次のように示されている。

Dri gum btsan poḥi sras/sPu de guñ rgyal gnam la dri bdun/sa le²⁵⁾ legs drug bços na/sPu de guñ rgyal groñs na//Grañ mo gnam gser brtsig/gSer brtsig gi sras//Tho leg btsan po/

Dri gum btsan po の御子、sPu de guñ rgyal、天では七 khri、地では六 legs が成婚の時、(また、) sPu de gun rgyal が死ぬと、Grañ mo gnam gser brtsig (が王となる)。(Grañ mo gnam) gser brtsig の御子、Tho leg btsan po

上の訳文は敢えてつけて見たものであるが、本文は、明らかな誤写の文であることを知る。gnam la dri bdun は、誰でも知るように、Ṅag (gṄa) khri btsan po から Khri spe (/Srib)²⁶⁾ btsan po に至る七代を云う称である。sa le (/hi) legs drug とは、Tho legs btsan po 以下の六王をまとめて云う称であることも周知のとおりである。この二つの名称の代りにここで Ça khyi の名があれば、然るべきであろう。gSer brtsig gi sras によって明かなとおり、

館の名を人名とし、legs drug と sPu de guṇ rgyal の間に虚構の一代を挟んでいる²⁷⁾のが確かめられる。しかし、この作為は、さすが後代の所伝には受け入れられなかつたらしく、その名はどこに²⁸⁾も見えていない。

以上は、単に、吐蕃の史家による作為の跡を示すに留ったものであるが、次に、王の世系表に盛りこまれた虚構を具体的に探り出して見よう。

II

Dri gum btsan po の死後、その子 Ça khyi が王位につき、sPu de guṇ rgyal を称する。その時彼を輔けたのが、王の父系の『おじ』の子孫、つまり、khu であるところの lHa bo (/bu) の Dar la skyes であった。従って、彼が最初の宰相になつただろうということは想像するに難くない。今、この二人の関係を確かめるため、敦煌年代記(ペリオ, PT文書1287)²⁹⁾の抄訳を次に試みよう³⁰⁾。

Dri gum btsan po は Lo ḥam rTa ḥdzi に殺され、蓋つきの銅の大箱³¹⁾に入れられて rTsaṇ³²⁾河の中流に投げこまれた。(箱は)下流の gSer tshaṇs にいた竜女 Ho de bed de riṇ mo の腹³³⁾に着いた。(Dri gum btsan po の)二子は Ça khyi 及び Ŋa khyi³⁴⁾と名づけられ、rKoṇ yul³⁵⁾に追いやられた。(l. 19~21; DTH, p. 98, l. 6~10)。

その後、(Lo ḥam rTa ḥdzi) は、彼に屈服した³⁶⁾ Rhya の4人の女を娶つた³⁷⁾。すると、sNa nam 王と Shoṇ 王³⁸⁾の2人は(憤って)、魔³⁹⁾の大犬『スパイの上手』と『ジャンの麗姿⁴⁰⁾』という、賢く、偵察能力の高い二匹の犬の毛に毒を塗り、けわしい断崖の、高い岩場を越え、pho la (/lha) の兆も吉と出たままに、(Lo ḥam rTa ḥdzi の住む) Myaṇ ro çam po の麓に至つた。そこで方策を講じて、毛に毒を塗つてあった犬をつれて、Dahi rta ḥdzi (sNa nam または, Shōṇ の王を云う)⁴¹⁾が、(Lo ḥam rTa ḥdzi の許に)行くと、Lo ḥam が「よい犬よ」と手で犬を愛撫した。Dahi rta ḥdzi が犬の毛に毒を塗つてあったので、手がよごれて(Lo ḥam rTa ḥdzi は)死んだ。(こうして)仇は討たれた(l. 21~26; DTH, p. 98, l. 10~18)。

その後、bKrags の子、lHa bu Ru(s) la skyes 一族と Rhya の一族が戦い合つて⁴²⁾、Rhya が bKrags の一族を滅し、主な家来も(Rhyaに)服属させられた⁴³⁾。(この時) bKrags の妾⁴⁴⁾の一人が逃れて里方⁴⁵⁾に辿り着いた。(そして、彼女が)腹に⁴⁶⁾(lHa bu Ru(s) la skyes の)子を孕んでいたのが生れた(l. 26~28; DTH, p. 98, l. 18~22)。

(この)子が膝で立つて(這つて)歩ける頃になるや⁴⁷⁾このかた、母に向つて「人はいかなる人であろうとも⁴⁸⁾主君がいる。ならば、私の主君は誰なのか。人はいかなる人であろうとも父がある。ならば、私の父は誰なのか。」と

尋ねた。「私に教えて下され。」というと、母は云った。「小童よ。大きい口をきくでない。小馬も幼いときは嘶かない⁴⁹⁾。わたしは知らぬよ。」と。すると、『sPus(/sPu) の子⁵⁰⁾、Dar⁵¹⁾に生れたる者』が云った。「私に教えて下さらぬなら、死のう。」と。こう云うと、母はやむなく一部始終を語り⁵²⁾、「お前の父は Rhya に殺された。お前の主君は btsan po で、Lo ñam rTa hdzi に殺された。屍体は蓋づきの銅の大箱⁵³⁾に入れられて rTsañ po の中流に投げこまれた。(箱は) 下流の gSer tshains にいた竜女 Ho de riñ mo の腹についた。(王の) 二子は Ça khyi 及び Ña khyi と名づけられ、rKoñ yul に追いやられた。」(と云った。)(l. 28~34 ; DHT, p. 98, l. 22~33)

さて、こうして、『sPur(/sPu) の子、Dar に生れたる者』が云った。「私は、いなくなった人の跡を辿り、水の消え失せる境域⁵⁴⁾を探りあてよう。」と。こういいながら、(母のもとを)去っていった。(そして) rKoñ yul の Bre snar⁵⁵⁾で王子 Ça khyi 及び Ña khyi と会った。竜女 Ho de bed de riñ mo とも会った。(彼女に向って、)「btsan po の屍体を何なりと欲しい物で贖いたい。」というと、(彼女は、)「他のいかなるものも欲しくない。(しかし、)その目は、鳥のようになっていて、(まぶたが)下から(上に)閉じる人⁵⁶⁾一人が欲しい。」と云った。(l. 34~38 ; DTH, p. 98, l. 33~p. 99, l. 2)。

(その後)『sPus(/sPu) の子、Dar に生れたる者』は、四方の天の涯まで探したが、その目が鳥の目のように下から閉じる者とは会えなかった。そのあげく、食糧も尽き、靴も孔があいたので、再び母の前に至って(云った)。「いなくなった人の跡は辿りえた。水の失せる場所も探りあてた。王子 Ça khyi 及び Ña khyi とも会った。竜女 Ho de [bed de] riñ mo と会った時、(王の)屍体の代償に、その目が鳥のよう下から閉じる人一人が欲しいと云われたが、まだそれを得ていないので、これから探しに行かねばならない。だから、路銀をもたせて下さい。」と。こういって、(路銀をもらって)立ち去った。(l. 38~42 ; DTH, p. 99, l. 2~10)。

彼が Gañ par⁵⁷⁾ hphrun の下に至った時、探し求めているような人間⁵⁸⁾で、鳥に似た娘が一人溝を堀っている⁵⁹⁾のに出会わした。その子は、若く、器量よし⁶⁰⁾で、目は鳥の目と同じく、下から上に(瞼が)閉じるものであった。そこで、母親に対して、娘(を欲しいが、そ)の代償に何が欲しいかと尋ねたところ、母親の云うには、「他のことは望まないが、将来いつであれ、必ず(次のようにして下さればよい。)(l. 45~47 ; DTH, p. 99, l. 14~17 この間の文意不明)そのようにする気か、しない気か。」とのことで、そのようにしようと誓い、約束をした後、求めていた人間である、鳥のような娘を連れて立ち去った(l. 42~48 ; DTH, p. 99, l. 10~20)。

(そして、)竜女 Ho de [bed de] riñ mo の腹に、(王の)屍体の贖として

(鳥女を)著けて送った。Ña khyi と lHa bu⁶²⁾ (Rus la skyes) の二人は(こうして Dri gum)の屍体を手に入れた。(そして,) Gyañ to bla ḥbub⁶³⁾ の尾根に墓を築いた。弟 Ña khyi が父の葬儀を出したのである。兄 Ça khyi は父の仇を討ち⁶⁴⁾に出かけたのである。Ña khyi とは rKoñ dkar po⁶⁵⁾のことである。(さて、兄の方は,) 三千三百の兵と共に出かけた。(まず,) Pyiñ ba の城に行つたのである。(そこで、宣言して,) 「父祖の国に主君がいなければ、外側の牧地は不安でザワザワのところ。父祖の地の所依の主⁶⁶⁾がいなければ、楊柳の(ある村中の)地は屍体がゴロゴロ⁶⁷⁾。」と仰云った。(そこから) Men ḥphreñ ba の峠を越え(ていっ)た。(更に,) Tiñ srab roñ riñs⁶⁸⁾ も越えた。(そして,) Ba chos guñ dañ⁶⁹⁾ に赴いた。Myañ ro çam po⁷⁰⁾ に至った時, Lo ñam の男百人は、自ら銅の柩に入り、頭から蓋して⁷¹⁾自決した。Lo ñam の女百人は、sLañ ña brañ 峠⁷²⁾を越えて逃れ去った⁷³⁾。(こうして,) Myañ ro çam po は陥ちた。立てる者(人間)は牢につなぎ、匍うもの(家畜一特に馬)は厩に入れた⁷⁴⁾後、(再び,) Ba chos guñ dañ に赴いた。(そして,) この歌を唱った。(歌詞の意味不明, l. 57~58; DTH, p. 99, l. 346~3) (それから) 再び Pyiñ ba sTag rtse に至った。(そして,) 「父祖の国の主君になった。外側の牧地は、不安のざわめきのない地になった。父祖の地の所依の主がいるため、楊柳のある(村なかの)地は、死体の転がらぬ地になった。」との歌を唱った。(以下本文16頁引用文続く。) (l. 48~62; DTH, p. 99, l. 20~p. 100, l. 7)。

III

上の訳文から次のようなことが確かめられる。Ña khyi と Ça khyi とを輔けたのが、Lha bu Ru(s) la skyes の遺児で、sPus kyi bu Dar la skyes と呼ばれるものであった。lHa bu Ru(s) la skyes とは、『神の子、(王の)父系に生れたる者』の意味で、Dri gum btsan po と同じ家系にあったことを示している。『神の子』lHa bu というのも、一族の呼び名として用いられたものらしく、『学者の宴⁷⁵⁾』では、彼⁷⁶⁾の別名として Khu bo lHa bu smon gzuñ を示している。これに対し、同書でその子とされる mGo dkar を、敦煌文書の宰相記では、Khu lHa bo mGo gar と示している。それも『学者の宴』の中では単に lHa bu mGo dkar となっている。訳出した本文中に「Ña lHa 二人」とあるが、後者の lHa が lHa bu を云い、Dar la skyes を指すことも明らかであろう。『学者の宴』は、実際は父方の叔伯父を示した筈の khu または khu bo という呼び方と、Khu という氏名⁷⁷⁾を不当に結びつけて、適当な説明を紹介しているが、Ru(s) la skyes を Ru las skyes と読み⁷⁸⁾、その出生の説明を誤った後代史家にとってはやむを得ない。敦煌文書では、Ru(s) la skyes の子を sPus kyi bu と称して、sPu 氏一族に連なる出生であることを重

ねて明らかにしている。sPus とあるのは、彼の名を説明する為に、「膝で立つ (spus la ḥgreṇ)」と示した一句を利用しようとする潜在意識があつて、そのもとで生れた sPu の異態字であるに過ぎない。彼等の家名が、今日では知られていない bKags⁷⁹⁾ であったことは、訳文で見るとおりである。

更に、Dar la skyes とある名の意味は、「Shaṇ shuṇ の Dar に生れた」ということであり、母の生家が Dar にあり、そこに逃れていて生れたことを示している。敦煌文書で Nar とあるのは Dar の誤記であり、この誤りは、Dar の意義を知らないまま古典的な史家の間でも Nar と伝承された⁸⁰⁾ようである。Dar は後で見るよう Shaṇ shuṇ の Dar pa または Dar ma と呼ばれるもので、その主君の称号は Lig sña cur である。また、敦煌に駐留した糸綿部落が Dar pahi sde と呼ばれていたことも既に知られている⁸¹⁾。この Dar pa とは Lig sña cur ばかりでなく、吐蕃王家も深い関連をもっていたらしい。その事は、王家の墳墓の地が、Yar luṇ の Phyin yul Dar pa thaṇ と名づけられることでも知られる。勿論、これも昔の史家達の知るところではなかった⁸²⁾。

sPus kyi bu Dar Ia skyes と、その父 Rus la skyes は後代史料の中では同一人とみなされ、Dar la skyes のことは Rus la skyes の名で言及されている⁸³⁾。Dar la skyes の母は Gri gum の妃と誤り伝えられ、Dar la skyes の出生が Gri gum の死後にあったため、白い『神人』の子とされたり、Yar lha çam po の子とされたりしている⁸⁴⁾。また、Lo ñam を殺したのも、Ru las skyes (Rus la skyes) こと Dar la skyes の所為とされる。後代の史料は、Ña khyi (Ña khri) と Ça khyi (Ça khri) の他に Bya khri の名を加え、彼を sPu de guṇ rgyal とするが⁸⁵⁾、これも、訳文で見るとおり、正しくない増廣である。

念の為に要約すると、Ñag khri btsan po の王統は Dri gum btsan po を以て一旦滅亡したが、その傍系の一族出身者 Dar la skyes の努力によって、Dri gum btsan po の長子 Ça khyi を擁立することで再興されたと述べられているのである。王家の第一代となり、sPu de guṇ rgyal を称したのは、rKoṇ po 碑文でもいう通り⁸⁶⁾、この Ça khyi である。これに対して、彼を輔けた Dar la skyes が第一代の大臣であつただろうということは当然である。

成程、後代の史料を見ると、Dar la skyes を Rus la skyes と同一視して Ru las skyes とはいが、この Ru las skyes を宰相としての第一代とする⁸⁷⁾点ではどのような異説も見当らない。

ひるがえって、敦煌文書を見ると、意外な記述に驚かされる。そのことは『宰相記』ともいるべきもの⁸⁸⁾の冒頭に明らかにされている。

btsan po lDe pru bo gnam gshuṇ rstan の御代以来、宰相をつとめた歴代について

て(いうと), 太初の初代は, ḥDahr の子 sToṇ daṇ rje がつとめた。(彼は) 賢く勇気あり, 心も忠であった。そのあとには, rNegs 氏の Dud kyi rje がつとめ, 勇気あり, 賢明であった。そのあとには, Khu (bo である) lHa bo (/bu) のmGar がつとめた。敵にむかっては勇氣あり, 心に情あり, 洞察力が鋭かった。

上に示される文では, lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan 以後の宰相だと云いながら, gnah thog ma「太初の初代⁸⁹⁾」という言葉を用いて最初の人物の資格を形容している。この王名は, 敦煌文書の王世系表⁹⁰⁾で見ても, Dri gum btsan po や sPu de guṇ rgyal の遙か後に「六人のLegs」と Zva gnam zin te を距て, 漸く見える名である。しかし, 宰相の名は, 先に見た Dar la skyes 『Dar に生れたる者』と非常に近い ḥDahr (/Dar) kyi bu 『Dar の子』というものである。しかも, これだけに留らない。『宰相記』は rNegs Dud kyi rje を距て, そのあとの大臣に Khu lHa bo mGo gar の名を与えていたのである。lHa bo mGo gar は, 既に見たように, Khu の Ru las skyes の子とされる lHa bu mGo dkar⁹¹⁾ と同一人物である。とすれば, 実は, Dar la skyes である Ru las skyes と, この ḥDahr (/Dar) kyi bu sToṇ daṇ rje が一致し, 更に, 吐蕃王家初代の宰相としても確認されねばならなくなる。つまり, ḥDahr kyi bu sToṇ daṇ rje とは, 後代史にいう Ru las skyes であり, 先に引用した敦煌文書によれば lHa bu Dar la skyes と云いかえられるものになるのである。

上の結論を受け入れるとすれば, lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan と云いうのは, sPu de guṇ rgyal の称とは別に, Ça khyi がもっていた他の一つの王号とされねばならない。このことをより確かに云うには, 二つの王号の間に介在する諸王の名が全くの虚構であるか, 他の名を繰り返して伝えているものであるかを示さねばならない。先ず, sPu de guṇ rgyal に続く「六人のLegs」についてこの点を調べて見よう。

先に問題にした lHa bu mGo dkar を『学者の宴』⁹²⁾では, 「六人のLegs」の最初の王 I ço legs の宰相としている。ところが, 敦煌文書の『宰相記』によると, lHa bo mGo gar⁹³⁾ は, lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan 代以降の宰相として第三人目にその名を連ねている。これだけでも, I ço legs 等を lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan の前に置くことは不可能であり, 虚構であることが充分知られる。念のために「六人のLegs」の名を見ると, その名が, 諸伝承によって甚だしく異り, その不正確さはこれに先立つ「天の七座」より著しい。試みに「六人のLegs」を並べてみると次のようになる⁹⁴⁾。

DTH	Grags pa rgyal mtshan's rgyal abs	Ma ḡi bkaḥ ḡbum	rGyal po bkaḥ thañ	Theg pahi rgya.
Tho leg (s)	No legs ḡog rgyu legs ṣo legs	I ṣo legs De ṣo legs	ṣo legs Li ṣo legs	Nes (/Des) legs Go rub legs
Go ru legs	ḥBro shin legs	Thi ṣo legs	ḥBro shin legs	ṣo legs
ḥBro shin legs	I ṣo legs	Gu ru legs	Gu rum legs	ḥBro shin legs
Thi ṣo legs	Riñ gnam zi legs	ḥBro ḡor legs	Za nam legs	E ṣo legs
I ṣo legs	Zi gnam zi legs	ṣer legs		gNam zi legs
Bu ston chos.	Hu lan deb.	gSal bahi me.	mKhas pahi dgah	gShon nuhi dgah
A ṣo legs	I ṣo legs	A ṣo legs	I ṣo legs	E ṣo legs
I ṣo legs	De ṣo legs	De ṣo legs	De ṣo legs	De ṣo legs
De ṣo legs	Thi ṣo legs	Thi ṣo legs	Thi ṣo legs	Thi ṣo legs
Gu ru legs	Gu ru legs	Gu ru legs	Gu ru legs	Gu ru legs
ḥBro ḡie legs	ḥBro she legs	ḥBro ḡer legs	ḥBro ḡher legs	ḥBro ḡer legs
Tho ṣo legs	I ṣo legs	I ṣo legs	ṣo legs	I ṣo legs

最後の三例は、*Hu lan deb ther* に二回見える *I ço legs* の名を夫々修正して出来上ったものであるから、独立の例とみなしがたく、その点からいえば、前の六例のみを考察の対象とすべきである。これらについて見ると、六王の世代順位が頗る不安定なことを知る。これでは、六王の間に本来順序があったと到底考えられない。つまり、今日見られる各種の順位に如何なる必然性もなかったということである。従って、「六人の Legs」は、吐蕃王家と限らず、初めから如何なる世系表とも関わりのない名称群だったと云わねばならない。こうして「六人の Legs」の名が、*Grañ mo gnam gseḥ brtsig* と同様、吐蕃王家の先祖を古くに遡らせるために後人によって挿入されたものであることを確認できるのである。

それではこの「六人の Legs」が何に由来しているかと云うと、確証を挙げることは困難であるが、*Nag khri btsan po* に服従したという *Bod ka g-yag drug*⁹⁵⁾とか、或いは、*Yab ḥbañs rus drug*⁹⁶⁾などに類するものから引き出されたのかと考えられる。これは、*gnam la khri bdun/sa le (/hi) legs drug* という一節があらわす対応を「天神七座」対し「地上で彼等に服属した六王」と解することで推定される。

「六人の Legs」のあとにくる *Zva gnam zin te* については、二つの解釈が成り立つであろう。一つは、*lDe pru bo gnam gshuñ rtsan* の父としての位置から彼に *Dri gum btsan po* の位置を与える、その別名として処理する方法である。この方は、後述のように難点が多い。しかし、多少支持を与える資料もないではない。有利な点をまず明すと次のようである。一般に、彼と *lDe pru bo gnam gshuñ rtsan* を含む「八人の lde」は「墓を河の中流に残した」⁹⁷⁾とされ、その為、湖に落ちた雪の如く（跡を残さなく）なった⁹⁸⁾といわれる。つまり、彼等は歴史的な存在を必らずしも保証されていないわけなのである。ただ、そのなかで *Zva gnam zin te* のみは、後代の書物であるが、*gTam gyi tshogs theg paḥi rgya mtsho* の中で⁹⁹⁾ *Phyiñ yul Dar po* (/pa) *thañ* に墓を残したと記され、ただ一人現実性を見せている。彼に比定されようとしている *Dri gum btsan po* は、敦煌文書によれば *Gyañ to bla ḥbub* に、古典的な史書のあるものによれば、やはり、*Phyiñ yul Dar*(pa) *thañ* に墓を残したとされるから¹⁰⁰⁾、古典的な史書の説を取れば、*Dri gum btsan po* と彼との比定は成功することになるのである。

第二の解釈は、第一の解釈がとる唯一の根拠を逆用して成立する。先ず「八人の lde」のうちの二番に来る *lDe pru bo gnam gshuñ rtsan* は、既に見たように、『宰相記』の冒頭に来る王であるから、その存在は最も現実的、歴史的なものとみなされた上、議論が進められてよいわけである。とすれば、*Zva gnam zin te* に与えられた *Dar po* (/pa) *thañ* という現実的な墓地名も、

むしろ、彼に与えられるべきものが誤って伝えられたのではないかと先づ疑われねばならない。そもそも、Dri gum btsan po の墓については、敦煌文書で Gyañ to bla ḥbub に造営されたとある以上、古典史家の説明する Phyin yul Dar (pa) thañ を捨て、それに従わねばならないのである。とすれば、彼に比定しようとする Zva gnam zin te の墓が、譬え、Dar po (/pa) thañ にあったとされても、両者の同一性を支持する有効な根拠としてそれを採り上げるわけにはいかないのを知る。

ところが、今、Zva gnam zin te を大胆に、王名ではないとして、lDe pru bo gnam gshuñ rtsan を修飾する副詞句と解すると、問題は一挙に解決する。lDe pru bo gnam gshuñ rtsan が第一代の王であるとすれば、少なくとも、彼の名にだけは、特に、sa gnam ḥzin te 「天地を掌握して」というような句を先行させることが許されたであろうし、それがいつの間にか Grañ mo gnam gseḥ brtsig のように、一代の王名として利用されるに至ったとしても自然である。Zva を Sa と読み替えることも、敦煌文書で zla/sla の交替が見られる事実から承認されるであろう。このような仮設を支持するかのように、rGyal po bkaḥ thañ や Grags pa rgyal mtshan の王統記には Zva gnam zin te の名が含まれていない¹⁰¹⁾。他方、Bu ston の仏教史¹⁰²⁾では、Za rnam zin lde の名を載せるが lDe pru bo gnam gshun rtsan の名の方を収めていない。これは、後者の方を説明的に把えた¹⁰³⁾結果ではないかと思われる。以上のとおりならば、Zva gnam zin te を葬ったとされる Dar po (/pa) thañ には、lDe pru bo gnam gshuñ rtsan の墓があることになるわけである。彼の墓地が Dar pa thañ と呼ばれる理由について、通俗起源説¹⁰⁴⁾はともかくとして、以下に述べる所を参考に供したいと思う。

IV

以上の説明によって、lDe pru bo gnam gsthun rtsan とは、Ça khyi 改めての sPu de guñ rgyal その人であり、その大臣 ḥDaḥr (/Dar) kyi bu sToñ dañ tje とは、sPus kyi bu Dar la skyes に他ならないとする所似について大方の同意が得られたものと思う。上の判断にもとづいて、敦煌文書に見られる或る記述を考察すると、そこに得られる結果から、既に下した判断について更に具体的な説明が得られるようになる。これは、我々が下した判断に対する、もう一つの有力な同意を示す事実に他ならない。以下に、今言及したばかりのそのことについて考察を始めよう。

かつて、故M・ラルウ教授は、“Catalogue des principautés du Tibet ancien”「古代チベットの小王国のカタログ」と題して、いわゆる“rgyal phran” 小王国について、敦煌文書に見える各種の名称等を整理して示した。

これによって話をすすめたいと思うが、そこに示される王、大臣等の名称一般について、先ず筆者の意見を明らかにしておきたい。既に、そのように理解して利用してきたのであるが¹⁰⁵⁾、これらは個人の名を示すものではなく、国王、大臣に寄せられている称号であり、場合によっては、夫々の歴史的な由来も示す名称のようである。

同カタログには、Shaṇ shuṇ の王として

Dar paḥi rjo bo Lig sñā cur (P. 1286),

Dar maḥi rje bo Lag sñā cur (P. 1290)

とあり、既に言及したところであるが、この王を Dar pa (/Dar ma) の主君と示している。Lig sñā cur の称号は、『敦煌編年紀』の643年の条その他¹⁰⁶⁾にも見え、その名は『敦煌年代記』¹⁰⁷⁾に見えるように、Lig myi rhya であったと思われる。sñā cur の称は他の同時代文書¹⁰⁸⁾にも見られ、Lig 氏に限られた称号ではなかったらしい。この Shaṇ shuṇ の blon po として示されているのは、Khyuṇ po Ra saṇ rje (P. 1286, P. 1290) と、他に一人あって、

sToṇ Lom ma tse (P. 1286), sToṇ Lam rma rtse (P. 1290)

とされる。今、前者の称号についていようと、以前にも述べたように¹⁰⁹⁾、殆んどがその領地名に由来している。Khyuṇ po の名は、彼等が古くに拠っていた Khyuṇ luṇ の Khyuṇ から得られているものと思われるのに対し、Ra saṇs rje の称は、Khyuṇ po Puṇ sad zu tse が rTsaṇ (/Saṇs) Bod (Rva を含む) 2万戸を領有した後に得たもの¹¹⁰⁾と考えられる。

ここで、ひるがえって、lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan の大臣 hDaḥr kyi bu sToṇ daṇ rje の名を考えて見ると、hDaḥr(/Dar) kyi bu は、Dar la skyes というのも同じで、一種の渾名であり、出自を示している。これに対して、sToṇ daṇ rje というのは、sToṇ draṇ rje, sToṇ braṇ rtse¹¹¹⁾などと云うのと同義で、「sToṇ 部の大酋」という意味に解せられ、むしろ、称号的なもので、その資格を表わしている。先に引用した sToṇ Lom ma tse (/Lam rma rtse) の sToṇ は、その王 Lig sñā cur が Dar pa (/ma) の主君であるとされることから考え合せても、hDaḥr kyi bu sToṇ daṇ rje の sToṇ と同じものを指すとしてよいであろう。

また、既に見たように、Dar la skyes は Khu または Khu bo をもって呼ばれるのであるが、『編年紀』には、Shaṇ shuṇ の叛乱に言及した後の678年と680年の条¹¹²⁾に、この Khu (の子孫) と Ra saṇ rje をめぐる事件が、二回にわたって並べて述べられている。ここでも Ra saṇ rje と並ぶことから、Khu と sToṇ Lom ma tse とを重ね合せることが可能になり、Khu と Dar la skyes との結びつきから、Dar la skyes sToṇ Lom ma tse という名称の連合が想定される。これが hDaḥr (/Dar) kyi bu sToṇ daṇ rje と同一内容を

指定するものになることには、勿論、疑念を挟む余地もない。おそらく、ここに見える sToṇ は、rus chen bshi の sToṇ とも結びつくものであるに違いない¹¹³⁾。

では、Lom ma tse (/Lam rma rtse) はどういう意味かというと、これは、Ra saṅs rje の場合から類推して、Lom ma の称の由来を明らかにすれば理解できるものと知られる。そこで、再び「カタログ」によって調べると¹¹⁴⁾、Myaṇ ro çam po の王の称号が

Loṇ ma byi brom tsha (P. 1286)

Loṇ ḥam rje taṇ ḥam cha phyi brom dkar po (P. 1060) とあるのを見る。既に見たように、この Myaṇ ro çam po は Lo ḥam rTa ḥdzi の拠った地であり、Ça khyi の軍によって征服された。今、右に見られる称号を整理してみると、P. 1286 からは Byi brom を、P. 1060 からは Phyi brom dkar po を除いて考えた方がわかり易い。すると、残ったものは、

Loṇ ma tsha と Loṇ ḥam rje taṇ ḥam cha になる。後者の Taṇ ḥam cha は、Loṇ ma tsha と類似の他の一称号らしいが、ここでは問題外のことであるから、省いて、考えないことにする。すると、Loṇ ma tsha と Loṇ ḥam rje の二つが考察の対象として残る。一見して明らかであるように、一方が他方の異態字で示されており、全く同一の称号と見てよい。tsha は cha と共に「君主」の観念とかかわりのある意味を示すものらしく、夫々縮小辞を伴った形の tsheḥu, cheḥu, rtse, rje によって「君主」に近い意味を表わす¹¹⁵⁾。結局、Loṇ ma tsha, Loṇ ḥam rje は、我々の探している Lom ma tse (/Lam rma rtse) の異態字であることが容易に承認できる。

Loṇ ma → Loṇ m → Loṇ ḥam → Loṇ ḥam → Lo ḥam
 |
 → Loṇ-m ma → Lom ma

こうして、sToṇ の君主が、Myaṇ ro çam po の王の称号をもっていたことがわかる。他方、Dri gum btsan po を殞した Lo ḥam rTa ḥdzi が、Myaṇ ro çam po に拠っていたことを思い合せてみると、彼の称もまた、この Loṇ ma に由来していたことが歴然とする¹¹⁶⁾。

では、sToṇ の君主がどうして Myaṇ ro çam po の王にしか許されない筈の称号をもっていたのであろうか。このような事態が存在するためには、次のような事実がその前提条件として是非とも必要になってくる。即ち、sToṇ を統べる或る王が、少くとも一時、現実に Myaṇ ro çam po を領有したという事実である。既に見たところによれば、ḥDaḥr kyi bu sToṇ daṇ rje に対してなら、この事実を立派に適用できるのである。彼 Dar la skyes は、吐蕃王家が Lo ḥam rTa ḥdzi によって覆された後、これを再興するに当って、運動の原動力になった。このことを踏まえて、当時の事情をふりかえっ

てみると、Ça khyi は軍勢を率いて Myaṇ ro çam po を襲い、Lo ḥnam rTa ḥdzi の旧領を悉く手中におさめた上で、Phyiṇ ba sTag rtse に即位した。「天地を掌握して」sPu de guṇ rgyal の高御座に登り、Lde pru bo gnam gshuṇ rtsan『lDe の化現者、天の御中主』と称した。その時、彼は、吐蕃王家再興の大功を嘉して、sPus kyi bu Dar la skyes に酬いた。何を以てであったろうか。いうまでもない。Lo ḥnam rTa ḥdzi の旧領 Myaṇ ro çam po を彼に賜わったのである。これによって Dar la skyes、つまり、ḥDaḥr kyi bu sToṇ daṇ rje は、以後、Lom ma tse (Loṇ ma tsha, Loṇ ḥnam rje) を併称することになり、sToṇ Lom ma tse の称号が世に行われるに至ったのである。

おわりに

本稿では、Ça khyi 改めての sPu de guṇ rgyal が lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan に他ならないことを、後者の大臣 ḥDaḥr kyi bu sToṇ daṇ rje が、実は Ça khyi の大臣 Dar la skyes その人であるという事実からつきとめ、一人に対する二王名の間に、「六人の Legs」と Zva gnam zin te とが挿入されているのをとりあげ、それらを不当なものとして吐蕃王の世系表から除いた。しかし、最初に述べた疑点は、これでもまだ解消しきっていない。何としても、lDe pru bo gnam gshuṇ rtsan のあと、Sroṇ btsan sgam po までに十四代の王統を数えるのでは、色々な理由からまだ不当に長いといわねばならないからである。今は、残念ながら加えて論ずる場所もないので、稿を改めて残りの問題を論じたいと思う。

略号表

- BSh R.A. Stein : *Une chronique ancienne de bSam-yas:sBa bżed*, édition du texte tibétain et résumé français, Paris, 1961.
- CPT M. Lalou : Catalogue des principautés du Tibet ancien, *J.A.*, 1965, pp. 190–215.
- CTB Z. Yamaguchi : *Catalogue of the Toyo Bunko collection of Tibetan works on history*, Tokyo, 1970.
- DMS bSod nams grags pa : *Deb ther dmar poḥi deb gsar ma, rGyal rabs ḥphrul gyi lde mig*, 1538, (Mr. gDan sa pa's MS, 80 f.), (CTB, 509–3054).
- DTH J. Bacot, F.W. Thomas, Ch. Toussant : *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris, 1940.
- GGG Grags pa rgyal mtshan : *Bod kyi rgyal rabs, Sa skyā bkāḥ ḥbum*, Vol. Ta, 196 b–200a (*Sa skyā pāḥi bkāḥ ḥbum*, Vol. 4–2 Tokyo, 1968).

- GKT lDan ma rtse mañ : *rGyal po bkaḥi than yig*, Shol Ed., 95 f. (CTB, 351–2617).
- HLD hTshal pa Kun dgaḥ rdo rje : *Hu lan deb ther*, 1346 (*Deb ther dmar po*, Sikkim, 1961, 40 p.).
- KGT dPaḥ bo gtsug lag hphreñ ba : *mKhas pahi dgaḥ ston* (*lHo brag chos hbyun*), 1545–1565, Vol. Ja, 155f, 1563.
- KTG A. Ferrari : *Mk'yen brtse's guide to the holy places of central Tibet*. completed and edited by L. Petech with the collaboration of H. Richardson, Roma, 1958.
- LPT A. Macdonald : Une lecture des Pelliot tibétain 1286, 1287, 1038, 1047, et 1290, *Études Tibétaines*, pp. 190–391, Paris, 1971.
- MNK *Ma ni bkaḥ hbum glegs bam dan po*, chos skyoñ bahi rgyal po Sroñ btsan sgam poḥi mdzad pa rnam thar, ff. 185 a–247 b. (CTB, 350 A–2611).
- NIK H.E. Richardson : A ninth century inscription from Rkoñ po, JRAS, Oct. 1954.
- ShG Nag dbañ blo bzañ rgya mtsho : *rDzogs ldan gshon nuhi dgaḥ ston dpyid kyi rgyal moḥi glu dbyañs*, 1643, 113 f. (CTB, 349–2609).
- SML *bSod nams rgyal mtshan : *rGyal rabs rnames kyi byuñ tshul gsal bahi me lon chos hbyun*, 1328/1388 (1368?) (CTB, 507 A–3051).
- SRD Bu ston Rin chen grub : *bDe bar gcegs pahi bstan pa gsal byed chos kyi hbyun gnas gsuñs rab rin po cheḥi mdzod*, 1322/3, sDe dge Ed., 203f., sña dar, ff. 117 b–125 b (CTB, 345 D–2560).
- TAM R.A. Stein : *Les tribus anciennes des marches Sino-Tibétaines*, Paris, 1958.
- TGJ dKon mchog lhun grub : *Dam pahi chos kyi byuñ tshul legs par bṣad pa bstan pahi rgya mtshor hjug pahi gru chen shes bya bahi brtsoms hphro kha skoñ dan bcas pa*, sDe dge Ed., 228 f. (kha skoñ, 1692, by Sañs rgyas phun tshogs), (CTB, 347 A–2606).
- TLT. II F.W. Thomas : *Tibetan literary texts and documents concerning the Chinese Turkestan*, part II, London, 1951.
- TTG gYo ru rdzogs chen pa Rañ byuñ rdo rje : *gTam gyi tshogs theg pahi rgya mtsho*, 271f. (CTB, No. 19–566(1)).
- TTK G. Tucci : *The tombs of the Tibetan kings*, Roma, 1950.
- YLD E. Haarh : *The Yar-lun dynasty*, Copenhagen, 1969.
- 「考異」 山口瑞鳳, 「古代チベット史考異」, 東洋学報49卷3, 4号, 昭和41年12月, 42年3月。
- 「古チ研」 佐藤長, 『古代チベット史研究』, 上下2巻, 京都, 昭和33, 34年。
- 「蘇毗」 山口瑞鳳, 「蘇毗の領界」, 東洋学報50卷4号, 昭和43年。
- 「吐国」 山口瑞鳳, 「吐蕃の国号について」, 日本西藏学会々報第18号, 1972年3月。

* 本論では SML を重要な史料として利用している。これが bla ma dam pa bSod nams srgyal mtshan の手になることは「考異」註 7・28 頁(96 頁訂正参照)に示したところである。このことは、DMS, f. 4a, l. 5 に dPal ldan bla mahi chos ḥbyun me loṇ mar ni ḥkhor bsgyur the ma ḥer mdzes ldan gyi bu rgyal po mchog sbyin/ḥdihi skabs (4a/b) su……とあり、SML, f. 3b, l. 5-6 に相応する記述が見えることでも明らかである。更に、KGT, Ja, f. 89a, l. 2 にも mi ma yin gyi don mdzad nas slar bSam yas su gcegs par snañ la Sa skyā bla ma dam paḥi chos ḥbyun las kyañ de ḥdra bar bçad とあって、相応する記述はやはり、SML, 85b, l. 5-6. の細字部分に示されている。つまり、Pan chen bSod nams grags pa も、dPaḥ bo gtsug lag ḥphren ba も共に、SML を bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan の書としているのである。我々は、改めてこの書を古代史の重要な史料として再確認しなければならない。

註

- 1) 「考異」52—61 頁参照。
- 2) 「古チ研」181—184 頁、186—188 頁。DTH, pp. 81—82. YLD, pp. 33—43, p. 73.
- 3) DTH, pp. 102—112. sTag bu sña gzigs から Khri sroṇ brtsan に至るまでの国家形成を知らせる最も古く、最もくわしい史料である。
- 4) 「古チ研」194 頁に、佐藤氏は「王統の実在は中国文献に信頼をおく限りラトドまでであって、それ以上は伝承の世界と見なすより外はないようである。」とするが、王統表の比較以上に立ち入らなかった E. Haarh 氏は、YLD の冒頭に諸本による王統表の研究 (p. 33—98) を試みているが、全く機械的な分類に終始しており、この種の疑惑に対する追求は見られない。A. Macdonald 夫人は細かい観察にもかかわらず、この点には全く気づかないで終わっている (LPT, pp. 227—228, p. 230)。
- 5) 敦煌文書では (DTH, p. 81) Ḇag khri と書くが、後代の史料では gṄaḥ khri (mṄaḥ khri) が普通 (YLD, p. 45) で、「首根に輿を載せた」という話までついている。全く別の説明は Bon 教系の書物に見えている (LPT, p. 208; YLD, p. 214)。rKoṇ po の碑文 (NIK, text, l. 3) では Ḇa khyi btsan po となっている。
- 6) Ḇag khri btsan po が降り立った山を lHa ri gyañ do とするのは、敦煌文書 (DTH, p. 81) も rKoṇ po の碑文 (NIK, text, l. 3) でも共通である。後代の文献では、14世紀の史書に新たに lHa ri yol ba (SRD, f. 118, l. 3) や lHa ri rol po (HLD, p. 15b, l. 6; SML, f. 24b, l. 1—2) が登場し、或いは、Yar luṇ にあるものとされ (HLD, p. 15b, l. 6), 或いは、そこから Yar lha çam po や Yar luṇ の地を賞でた場所 (SML, f. 24b, l. 2) とされたが、16・7 世紀になると、前後に現れた二山を結びつけて、lHa ri gyañ tho に降り立ち、Yar lha

çam pho や Yar luṇ を賞でて, lHa ri rol po(hi rtse) から bTsan thaṇ sgo bshi に降ったもの (KGT, Ja, f. 6b, l. 2; ShG, f. 11a, l. 3—4) とされるに至った。ここで観察されることは, gÑah (Ñag) khri btsan po の降り立った山を強引に Yar luṇ の地と結びつけようとする試みの跡である。一般に, lHa ri gyaṇ tho が rKoṇ po の地にある (YLD, pp. 140, 273) とされるため、この調整が必要になったのであろうが、根本的には、Ñag khri btsan po を直接 Yar luṇ に結びつけねばならない動機が他にあったらしい。事実 rKoṇ po の碑文には、彼以来七代 Phyin ba sTag rtse に住んだと、如何にも殊更な表明をしており、そこに共通の要請がったことを知らせてくれる。Yar luṇ 王家の同族は、rTsaṇ stod (=Myaṇ, 今日の Ñaṇ po, rKoṇ po の北西) や rKoṇ po にいて、Yar luṇ はその一支部であった(「吐國」2頁中段参照)。しかし、この事実を承認することは、彼等の特出した地位を放棄して、Yan lag sum paḥi ru を構成する同族や、rKoṇ po の同族と対等の地位に降ることを意味していた。従って、彼等は、是非とも Ñag khri btsan po 以来 Phyin ba sTag rtse に君臨した別族の本家でなければならなかったのである。rKoṇ po 碑文のいろいろに従う限り、Dri gum btsan po の墓が何故 Gyaṇ to bla ḥbub 「天の支柱」(lHa ri gyoṇ tho の一つの峰としか思われない) (LPT, p. 222, n. 133) に築かれたかという疑問や、Ñag khri btsan po 以来の墓が何故の Phyin ba sTag rtse の近くにないかという疑問に答えることが出来ない。まして、この七代も Sroṇ btsan sgam po を遡ること僅か六代前に終ったものとわかれば、この疑問は決定的な価値をもち、rKoṇ po 碑文に見える作為が殆んど実証されたのにも近い。筆者は、lHa ri gyaṇ tho をむしろ、今日の lHa ri mgo 拉哩に推定している。lHa ri gyaṇ tho が rKoṇ po にあったとするのに対して、Macdonald 夫人は却って疑惑を表明 (LPT, pp. 200, 209) し、これを Yar luṇ にもっていこうとするが、この試みは、文献批判を欠いたチベットの史家と同じ轍をふるものであり、例えば、dPag bsam ljon bzaṇ が Yar luṇ kyi gaṇs ri Yar lha çam poḥi lHa ri rol rtse とするのに近い。同夫人は、Yar chu と Yar luṇ chu を簡単に同一視する上、Se mo gru bshi (「蘇毗」55頁) などについての認識も安易であり、その意見は首肯しがたい。lHa ri gyaṇ tho, lHa ri yol po, Yar lha çam po 等の関係については、YLD, p. 273 によくまとめられている。

- 7) 王号として Gri gum btsan po (Dri…, DTH, pp. 81, 97) という不吉な形はありえない。この名は説話に合せた変形であり、想定される原形は Khri guṇ btsan po (TGJ, f. 116a, l. 7, Khri khuṇ btsan po) である。この形の略形が Khri b(r)tsan となることに注意したい。
- 8) 註6参照。Phyin ba sTag rtse は Yar luṇ Sog ka にある (LPT, p. 312, n. 433; Yar yul Sog ka ru/mkhar Phyin ba sTag rtse bshug)。この地は、いわゆる Phyin yul, Phyin luṇ (LPT, p. 200) と古くによばれたところで、

Phyiñ (/h*Phyiñ*) *ba* の称が更に一語を伴うと、*hPhyoñ* の形に転ずるように見える。*hPhyiñ ba mdaḥ/hPhyiñ wu(phu/)mdaḥ/hPhyoñ wu mdaḥ/hPhyoñ mdaḥ* (TTK, pp. 3, 31, 76, n. 14)。今日、この地区が *hPhyoñ rgyas* と呼ばれる所以の一端がここに見られる。

- 9) 註 6 参照。*Nag khri btsan po* が *lHa ri gyañ do* に降り立ち、*Bod ka g-yag drug* を従えたと敦煌文書 (DTH, p. 81) にいうが、*Bod ka g-yag drug* が「模徒」、または、*rTsañ Bod* の *Bod* をいう（「吐国」2 頁上段参照）ものならば、*Nag khri btsan po* 以来七代 *hPhyiñ ba sTag rtse* にいたとすることは如何にもそぐわない。おそらく *rKoñ po* あたりを本拠としたに違いない。
- 10) DTH, pp. 99—100, *Pyiñ ba sTag rtse* と示す。
- 11) *rKoñ po* 碑文にこの称を用いている (NIK, text, l. 3)。
- 12) DTH, p. 100 で *sPu de guñ rgyal* の説話は終り、pp. 100—102 にかけて『宰相記』があり、ついで、pp. 102—105 にかけて *sTag bu sña gzigs* 代にあった *Ziñ po rje sTag skya bo* と *Ziñ po rje Khri pañs sum* の争い、*sTag skya bo* なきあとの *Khri pañs sum* に対抗する諸侯の同盟と、*sTag bu sña gzigs* の役割へと話が及ぶ。
- 13) 14世紀中葉に政権を掌握した *Phag mo gru pa* も、この地方の *rTse thañ*, *sNeñu gdoñ* に拠った。これらは、*hPhyoñ rgyas* の北、*Yar luñ chu* を下ったところに位する。g-Yo ru 地方の中心 *Khra hbrug* もこの地方にある。
- 14) DTH に収められ、Stein 文書 Tun-Huang 103 (19 VIII. 1) と Pelliot チベット文書 1288, 1286, 1287 から成っている。
- 15) BSh, p. 53, l. 5—8。
- 16) 『通鑑』の建中二年十二月の条と、これに相当する新旧『唐書(吐蕃伝)』には使節崔漢衡に抗議した旨が伝えられている。「來敕云、所貢獻物並領訖、今賜外甥少信物、至領取。我大蕃與唐舅甥國耳、何得以臣禮見處。」(『旧唐書吐蕃伝』) また、823年にたてられた唐蕃会盟碑の文面にも、その威信に関して払った注意が至るところにうかがわれる。この碑文に用いられている年次日附は、チベット固有のものではなく、唐のそれを完全に倣ったもので、*Khri gtsug lde brtsan* 王の即位年号としている *sKyid rtag* も、実は「長慶」の翻訳語を用いたものである。このようにしてまで唐側にあるものは、吐蕃側でもすべて完備していることさら見せつけたのである。
- 17) DTH, p. 100, l. 4—7。
- 18) *zañs rdo, dñul rdo* は銅礦石銀礦石である。銅器を精鍊する鍛冶と王権との関わりを示す古い慣習が、王権を掌握したものを祝福する吉兆として意識されていたのではないだろうか。YLD, p. 121 参照。
- 19) *bços* は *hchos* の別形で、*hchos* には「ととのへる」、「つくる」、「なおす」、「癒す」などの意味がある。「つくる」の語義をもった *bços* は、「子を生ませる」から「交媾する」意味で敦煌文書に現れる。*hchos* から転じた *bços* にも

「つくる」, 「改める」, 「癒す」の意味がある。なお, 上に関して ḥchar/čar, ḥchor/čor, ḥchags/bčags, ḥchad/bčad の同義語対応を参考にしたい。

- 20) groṇs は groṇ khyer「邑」の groṇ に類する。異態字 ḥbroṇs/braṇ の「従う」の意味から mchis braṇ「侍るところ」「住むところ」の語が出来る。braṇ sa「住い」の意味である。
- 21) Graṇ mo は braṇ mo「大館」, gnam bseḥ は「天に（聳ゆる）一角」の意味。
- 22) chaḥu, tshaḥu から cheḥu, tsheḥu, 更に che, rje, rtse などの語が出来て（「蘇毗」43頁註62参照）, 「主君」を意味するのであるが, その源の字は cha/tsha+bu から成る。charは, char rkyen の場合, 「主として依止される対象」の意味になっている。chab ḥbans 等の場合, chab (/cha ba?) は「主権」の意味を示している。rkyen は rten「依りどころ」であり, 「飼主」の意である。
- 23) 別の解釈については YLD, p. 406, XXIII, XXIV. 参照。
- 24) DTH, pp. 81—82。
- 25) 明らかに hi の誤写。
- 26) spe と srib は非常に似た字体で書かれることがある。srib の b を右側に書かず, 下に書き副える場合がそれである。
- 27) 「古チ研」176頁では, この名を受け入れている。
- 28) YLD, pp. 33—38 参照。但し, KGT, Ja, f. 8a, l. 3 では gNam lha gser thig の名が見えるが, 王名とはしていない。
- 29) DTH, pp. 98—100。
- 30) 他の訳文に関しては, 一々比較しない。YLD, pp. 402—406; LPT, pp. 221—227 (但し, レジュメである) 参照。
- 31) zaṇs brgya の brgya は「百」ではなく, sgyaḥu/sgye→sgye mo「容器」の sgye の異態字と思われる。後代史料の対応箇所では「銅の箱」(KGT, Ja, f. 7b, l. 2; ShG, f. 11b, l. 4) として brgya を gaḥu の意にとらえている。YLD, pp. 403, 453, n. 14; LPT, p. 221, 3 参照。
- 32) この河が, いわゆる rKoṇ po の chu rlag で消えているものならば, いわゆる gTsaṇ po に相当するであろう。KGT, Ja, f. 7b, l. 3 は Ŋaṇ chu skyā mo の名を示すが, rGyad mkhar Pa tshab, Khri ḥthaṇ ḥgur mo を過ぎて rKoṇ po に至ったと云い, ShG, f. 11b, l. 5 では Koṇ chu rlag に至ったとしている。LPT, p. 224, n. 137 参照。但だ, 敦煌文書に見える rTsaṇ yul については充分注意が必要である（「蘇毗」10—18頁参照）。
- 33) 「腹についた」という訳は, YLD, p. 403; LPT, p. 221 に共通である。KGT, Ja, f. 7b, l. 3 では竜神 Ho te re の婢女 Bye ma lag riṇ が (ShG, f. 11b, l. 5 では水神 Bye ma lag riṇ が) 尸体を手に入れ, 主人が藏したとなっている。
- 34) Ça khyi, Ŋa khyi の名を合すれば, ça ŋa となる。これは ça gñard (DTH, p. 13, 653 AD.) 「仇を討った」ことを示す名と理解してよいであろう。
- 35) Ŋag khri btsan po が元来 Phyin ba sTag rtse にいたものならば, 彼等が

- rKoṇ yul へ逃れた説明がつきにくい。註6, 9参照。
- 36) rhul を rtul と読むと、「屈服したもの」の意味になる。
- 37) khugs は, hgugs, dgug, bkug 「娶る」の別形, hkhug の過去。但し、結果的状態を示す2類自動詞。「娶られた」の意味とも考えられる。
- 38) gñis と云う数詞に対して、「Rhya……と sNa nams……」という解釈 (YLD, p. 403, VIIIa; LPT, p. 222, n. 127, p. 224) をとるのは誤りであり、次の二節に現れる Rhya と bKags の争いについての解釈を不可能にする。「二」は sNa nams btsan ba (sNa nams 王) と Shoṇ rgyal (Shoṇ 王) を指し、二王の決起を促した直接の原因として、Lo ḥam に Rhya が屈したことを挙げている(「時」を示す daṇ の用法)のである。なお、Shoṇ は CPT, p. 204 (Pelliot Tib. 1285) に rgyal phran として示され、KGT, Ja, f. 19b, l. 4 には (d) Brad (CPT, p. 202, Pelliot Tib. 1286, 1290) と Shoṇ pa の地が sNa nams 領となつた旨が明らかにされている。なお、この領有は Khri sroṇ lde brtsan 代の事情を反映するものと推定される(「蘇毗」39—40頁、註42参照)。
- 39) sri/srid/srin は「不思議な能力をもつ」ことをいうのであろう。
- 40) ḥJoṇ stod, ḥJoṇ smad は、Yan lag gsum paḥi ru に含まれる地域名であるが、ḥJaṇ は南沼ではなくこの地を指すものか、或いは ḥdzaṇs 「賢い」の異態字であろう。Zu le ma は、gzugs legs ma と解した。
- 41) rta ḥdzi は rgyal phran の称号の一つと思われる。Khri sroṇ brtsan 殤後に制定されたらしい (DTH, p. 13, 654AD.) g-yuṇ sde 組織の説明 (KGT, Ja, f. 20b, l. 2) に rje dgu 「九侯」に続いて、「Lo ḥam rTa rdzi などの七rdzi」と示されている。従って、rje につぐ地位とも理解される。例えば、mChims 氏の仕事を lug rdzi としている一節も伝えられている (KGT, Ja, f. 19a, l. 4) のを参考にしたい。ḥaḥi rta ḥdzi は、Daḥi rta ḥdzi であろう。Daḥi は吐谷渾の官名にはよく見られ(「考異」下44頁、75頁、註52参照)、そこでは da re と併用されて「大」の意味になっている。本文中の Daḥi rta ḥdzi は、sNa nams 王か Shoṇ 王のいづれかを指すのであろう。
- 42) Lo ḥam rTa ḥdzi が殺された後、Lo ḥam rTa ḥdzi に屈した Rhya と、Dri gum btsan po の父系の親族 bKags とが戦い合う (du thabs) に至ったのである。bKags の首長は、lHa bu (/bo) Ru(s) la skyes と呼ばれた。これは『父系親族(rus)として生れたもの』という意味の渾名である。(KGT, Ja, f. 8b, l. 2 参照) 以下の物語と後代の所伝の相異については LPT, pp. 224—225 参照。
- 43) dud sna pho lo を dud sna (=dud chen) phol lo (ḥbol の過去) と解した (DTH, p. 125, n. 4; YLD, p. 453, n. 17)。
- 44) chuṇ ba は正妻でない妻 (LPT, p. 222, n. 128) であり、子ではない (YLD, p. 403, IXc; LPT, p. 225)。
- 45) pha miṇ は、「母党」、里方を云う語。この pha は、「一族」を云う pha

- tshan の pha (LPT, p. 222, n. 126) と同じであろう。YLD, p. 403, IXc 参照。
- 46) 原文は lto na bu khyer とある (YLD, p. 453, n. 18; LPT, p. 222, n. 129)。
- 47) spus la ḥgreṇ nus 「膝で立てる」は、「漸く大きくなつて匍える頃、既に」の意味であり、sPus kyi bu を説明する為の、物語りとしての伏線になっている。sPus は、元来 sPu の異態字に過ぎないが、既に原義を見失いかけていたものと云えよう。このところを «de qualité» (LPT, p. 222) としたり、«the son sPus» (YLD, p. 404, XIa) としたのでは、物語の内容を損ねた読み方になる。
- 48) mi gaṇ bya gaṇ の最後の gaṇ は、gaṇ shig に当るものであり、gaṇ bya は「何と呼ばれる」の意で mi 「人」を修飾している。bya は「鳥」の意味 (DTH, p. 125; YLD, p. 404, XIa) ではない。
- 49) Kha ma che çig は kha che の否定命令、Kha ma drag は Kha ma ḥgrag の異態字。ḥgrag は sgra sgrog の意であろう。「大人びた生意気な口をきくな」と云つたもの。
- 50) DTH, p. 125, n. 6 の説明は取らない。sPus は sPu の異態字で、Khu と云つたり、Rus la skyes といったりするのと同じいわれで、sPu rgyal 「不夜」、sPu de guṇ rgyal の sPu であり、Pelliot Tib. 1038, l. 18 (LPT, p. 215) に “gduṇ sPu bod daṇ sPu rgyal du gsol” 「家系を sPu と呼ぶので、sPu rgyal と申し上げた」とあるとおりの sPu 氏であり、その血をひいていることを示すである。註42, 47 参照。
- 51) Ḋar と Dar との誤り易いことは、例えば、DTH, p. 80, l. 3 に、ጀar paḥi rjo bo とある Pelliot Tib. 1286 の箇所を、CPT, p. 204 では Dar pa と讀んでいることによつても理解できよう。また、他の例では、KGT, Ja, f. 8a, l. 2—3 に Dar pa than の「いわれ」を説いて “ጀar ra” (註104 参照) と示しているのが見られる。
- 52) gdod bstan te, gdod ma bstan te 「事の始りを明かし」の意味であろう、「一部始終を語り」か。
- 53) zaṇs rgya ma は、sgye mo 原形を思わせる。註31 参照。
- 54) chu rlag と rKoṇ gi chu rlag とは関係あるかどうかは知らないが、後代の文献では両者を結びついているようである (註32 参照)。
- 55) DTH, p. 105 にも見えている。
- 56) 後代の文献は、この記述を誤り伝え、Bya khri の名を設け、これを sPu de guṇ rgyal にしている (SRD, f. 118a, l. 6; HLD, p. 16a, l. 2; SML, f. 25b, l. 3; KGT, Ja, f. 8a, l. 6—7; ShG, f. 11b, l. 4—6) が、おそらく、sPu 氏の属する Phyvah (/Bya) 部族 (「吐國」2 頁上・中段参照) の女を Ho de (Ho ma lde) に嫁せしめ、連繫を遂げて、王家の再興をはかれとの提案を受けたのであろう。
- 57) Gaṇ par は、Pelliot Tib. 1286 (LPT, p. 195) に lDeḥi Gaṇs bar として

見えているものに同じであろう。lDe は、sPu 氏と婚姻した四つの女国の一つである。女国は、父系相続と思われる Phyvah 族の sPu 氏と婚姻した場合、その子孫は sPu 氏であり、同時に lDe 氏であることになるから、lDe 氏と sPu 氏の間に生れた Phyvah の女なら、Gaṇs bar にいてもよい筈である。DTH, p. 126, n. 2 にあるように、Ñag khri btsan po にも鳥のような目の特徴をいうものがある。これもまた、部族名 Phyvah に由来していることを暗示しているように思われる。

- 58) cho myi は、cho yod pahi mi 「必要な人」の意であろう。
- 59) 「眠っている」(DTH, p. 126; YLD, p. 405, XVIIa) は取らない。その解釈の場合は “yur ba” のみでよいと思われるからである。
- 60) bu khu は、今日の bu gu (phru gu と同語源と思われる。ḥbraṇs/ḥbaṇs; draṇ/dan 参照)と同じ、hjo は mdzes po の意で、na は na chuṇ 「若い」ことを云う。
- 61) YLD, p. 405, XVIIb; LPT, p. 222, n. 131 参照。
- 62) Ña lHa の lHa は、lHa bu を指す。sPus kyi bu も、父と同じく、lHa bu と呼ばれたに違いないからである。その子は、KGT, Ja, f. 9a, l. 2 では lHa bu mGo dkar; DTH, p. 100, II, l. 5 では Khu lHa bo mgo gar である。Macdonald 夫人の説明 (LPT, p. 222, n. 132; pp. 225—226) は、DTH, p. 127 のそれと共に、全く当らない。
- 63) Gyaṇ to bla ḥbubs, LPT (p. 222, n. 133) の理解は不可解。bla ḥbubs は、最も高い『蒼穹の支柱』を意味するから、Gyaṇ to の峯の 1 つであり、mgur は山の尾根を云う。葬儀の用語はここには含まれていない。
- 64) sku mtshal gñer は ça gñar 「仇を討つ」(DTH, p. 13, 653 AD) の敬語。gñar (/ñar), gñer は同義。sku mtshal は khrag 「血」の敬語。
- 65) NIK, text, l. 1 + 5; CPT, pp. 200—201; DTH, p. 99.
- 66) 註22参照。
- 67) YLD, p. 405, XVIIId の訳は取らない。本稿の訳も確信のもてるものではない。
- 68) LPT, p. 224, n. 137 参照。
- 69) CPT, p. 196 参照。DTH, p. 21, 714 AD によると、Mal troe (trohi) ltam に ḥdun ma が開催されたとある。今日の lTam çul は Dri gu mtsho の南西にある。しかし、CPT では、lTam çul の地として Guṇ daṇ の名をあげている。もしこれをとれば、Ba chos guṇ thaṇ も、sKyid chu 上流の南岸、rGya ma Rin chen sgaṇ の東方の地域、sKa tshal の南に位する一帯に当る (KTG, pp. 109—110, n. 113)。
- 70) Dahī rta ḥdzi が、Lo ḥnam rTa ḥdzi を謀殺する為に Myaṇ ro çam po に赴いており (DTH, p. 98, l. 14—15)，かつて、Dri gum btsan po も、Myaṇ ro çam po に赴いて、この地に以前からいた(sñar mchis so) Lo ḥnam rTa ḥdzi とたたかった (DTH, p. 97, l. 22—23) といわれるから、この地を Lo ḥnam rTa

ḥdzi の所領とすることが出来る。Myaṅ ro Phyed kar は、rTsaṅ stod にあり、rKoṅ po の北西部を占める。今日の Ḋaṅ po であることは、かつてくわしく見た(「蘇毗」10—18頁)ところであるが、この Myaṅ ro çam po (CPT, p. 198) が何処にあるのかは、必らずしも明らかではない。Dri gum の屍体を捨てた rTsaṅ chu を gTsaṅ po とすれば、成程、今日の Gyantse に近い Myaṅ をその地に比定したくなるが、それだけでは聊さか安易に過ぎる決論のように思われる(LPT, p. 224, n. 137)。

- 71) klad la ḥdub 「頭上に蓋する」の過去形と取る。「柩に生きながら入った」の意か。註69参照。
- 72) sLaṅ ḥa は sLaṅ ba の異態字、Myaṅ yul の王号に Myaṅ tsun slaṅ rgyal というのがある(CPT, p. 198)が、この sLaṅ はその地名であろう(YLD, p. 406, XVIII f の説は取らない)。
- 73) ḥchar te ḥnog go は、ḥchar te soṅ ḥno の意(YLD, p. 406, XVIII f. は意味を成さない)。
- 74) LPT, p. 223 では、"Il emprisonne les êtres humains et tue le bétail", と説明するが、後半は正しくない。当時畜生を無駄に殺すわけではなく、mnañsu bcad は「かこいの中に入れて外界としきる」の意である。DTH, p. 127 も、YLD, p. 406, XIX も正しくない。勿論、自らの用に供する為である。なお、YLD, p. 231, p. 447, n. 2; ibid. pp. 310, 311 に見える ḥgreñ と dud の訳は首肯できない。筆者は G. Uray 氏の結論("Greñ", Acta Orientalia Hung. 19, 1966, pp. 245—256)を尊重する。dud rdog (YLD, p. 231, p. 447, n. 2) はありえない。rdog は ḥnog-chag 「たてがみある生きもの」, srog chags ḥnog ma can 「馬」を表わす字の一部であるから、ṛnog であって、rdog にはならない。
- 75) KGT, Ja, f. 8b, l. 2。
- 76) Dar la skyes のことであるが、後代の文献では、その父の名 Ru(s) la skyes をもって示されるのが普通である(LPT, p. 225)。lHa bu は、lHa sras から敬称を去った形になっている(註96参照)。似たような呼び方は、吐蕃王家と合流した四女国一つ Dags po (LPT, p. 195) に対して云われる lHa sde の称であろう(DTH, p. 107, l. 9)。
- 77) 『宰相記』には、Khu lHa bo mGo gar のあとに、Khu Khri sña dgu zuṅ, Khu Maṅ po rje lha zuṅ の名があり、『編年記』中にも、Khyuṅ po の称号 Ra saṅ rje と共に見え(DTH, p. 15, 679 AD)ている。KGT, Ja, f. 8b, l. 2 では「父方の叔伯父として崇った」とあり、恰かも本当の khu bo ではなかったように示している。
- 78) SML, p. 25a, l. 6; KGT, Ja, f. 7b, l. 6; LPT, p. 225。
- 79) bKrats の後代史料における変形については LPT, p. 225 参照。Dar la skyes が Myaṅ ro çam po を領有したとする結論を本論末尾で見るが、CPT, p. 198

- では、Myaṅ yul の大臣として sPrags (/? bKrags) の名を見る。
- 80) KGT, Ja, f. 7b, l. 6 “Ru la skyes dañ Nar sos po ces btags” とある。「角中に生れて自活せるもの」の意であろう。
- 81) 「蘇毗」41頁、註47参照。
- 82) KGT, Ja, f. 8a, l. 2—3。註51参照。後代史料では Dar(pa) thañ を Dri gum btsan po の墓地とする (KGT, Ja, f. 8a, l. 3; ShG, f. 11b, l. 5; SML, f. 25b, l. 2) ばかりか、btsan lha の墓もここに置く (ShG, f. 13a, l. 4) 例がある。
- 83) 註76参照。
- 84) SML, f. 25a, l. 5—6; KGT, Ja, f. 7b, l. 5—6; ShG, f. 11b, l. 4.
- 85) 註56参照。
- 86) NIK, text, l. 5, “Ça khyi ni/lha btsan po/” 「Ça khyi こそ lha btsan po」 とあるのは、sPu de guñ rgyal を称して lha btsan po となつたのが、Ça khyi であるという証言に他ならない。
- 87) SML, f. 25b, l. 4; KGT, Ja, f. 8b, l. 2; DMS, f. 11a, l. 5.
- 88) DTH, p. 100, l. 9, Pelliot, Tib. 1287. (2)。
- 89) LPT, p. 228, Macdonald 夫人は、この語に注目しながら問題の解決に進んでいない。また、Khu lHa bo mGo gar と Ru la skyes を誤って同一視している。
- 90) DTH, p. 82, l. 7。
- 91) KGT, Ja, f. 9a, l. 2—3; ShG, f. 12, l. 1.
- 92) KGT, Ja, f. 9a, l. 2.
- 93) 敦煌文書 (DTH, p. 100, II, l. 5) では Khu lHa bo mGo gar であり、KGT, Ja, f. 9a, l. 2 では lHa bu mGo dkar shes/ Khu khu Ru las skyes kyi bu とあって、両者の同一は殆んど完全に保証されている。
- 94) DTH, p. 82; GGG, Ja, f. 97a(5a), l. 2—3; MNK, f. 187b, l. 5; GKT, f. 19a, l. 1—2; TGJ, f. 116b, l. 2; SRD, f. 118a, l. 6; HLD, p. 16a, l. 4—5; SML, f. 26a, l. 6—f. 26b, l. 1; KGT, Ja, f. 9a, l. 2—4; ShG, f. 12a, l. 2—3.
- 95) 「吐國」2頁上段参照。
- 96) KGT, Ja, f. 6b, l. 2—3, btsan pa lHa dañ gÑags (=gÑegs)/btsun pa Khyuñ dañ sNubs/gñan pa Se dañ sPo ste yab ḥbañs rus drug dañ lHa bo lHa sras. TAM, pp. 11—14.
- 97) HLD, p. 16a, l. 6; SML, f. 26b, l. 2; KGT, Ja, f. 9a, l. 6; ShG, f. 12a, l. 5.
- 98) SML, f. 26b, l. 2 と KGT, Ja, f. 9a, l. 6; TGT, f. 124b, l. 1 には「墓を河の中流に残した」ことの結果をこのように示している。Dri gum btsan po が墓を残した (DTH, p. 99, l. 23; KGT, Ja, f. 8a, l. 2; SML, f. 25b, l. 2; ShG, f. 11b, l. 5; FLD, f. 16a, l. 4) と云った手前、その後の王墓については、墓は残したが、現存しないと説明しなければならなかつたのであり、この間の事情を云い訳がましく洩らしたものであろう。
- 99) TTK, p. 2; TTG, f. 124b, l. 1 (CTB, p. 5, No. 37 参照) Zin lde man chod

bañ so yul la btab/.....yul gyi miñ ni ḥPhyiñ yul Dar moḥi thañ/。

- 100) 註6, 註82参照。
- 101) GKT, f. 19a, l. 2; TGJ, f. 116b, l. 2; GGG, Ta, f. 197a, l. 3. 但し, 3本とも「六人の Legs」の最後に示されるものは, Zva gnam zin te と同じ根拠に基く名とすべきであろう。このことは, 「数」を充たす為に, そこにあり合わせた「副詞句」を或いは右に, 或いは左に転用したという事情を示している。
- 102) SRD, f. 118b, l. 1.
- 103) 接続辞 ste, te, de は説明を先立てるこもあれば, それを従えるこも可能である。最もありそうな場合を考えると, “Za rnam zin lde (SRD, f. 118b, l. 1) ste pru bo gnam gshuñ [du] brtsan” 「Za rnam zin lde にして, 化現せるもの, 中天の霸者」と読んだことであろう。
- 104) KGT, Ja, f. 8a, l. 2 には Dri gum btsan po の墓地とはしている(註82参照)が, Dar pa thañ のいわれを説明し, 尸体が Na ra ra (Da ra ra/Dar ra [/Dar ba] の誤写) と云ったからとしている。
- 105) 「蘇毗」55頁参照。
- 106) DTH, p. 13, 643 AD ; p. 15, 671 AD, “btsan mo sÑa mo steñs sÑa çur spuñs Rye rkyug la bag mar gçegs.....” 「皇女 sÑa mo steñs が sÑa çur の弟 Rye rkyug に嫁し.....」ともある。spuñs の用法については, ibid, 678AD に “Ra sañ rje spuñ Rye ryuñ” ともあり, khu を用いた例では, ibid. 677 AD に “Rye çiñ khu Bul bu” 「Rye çiñ の父方のおじ Bul bu」ともあり, 訳についての問題はない。これらから, 別に, Shañ shuñ (Lig, Khyuñ po, lCog la) 系の名称の特徴がうかがえる。この点からも, sÑa çur の名の他に, 固有の名称 Lig myi rhya を推測する理由が生れる。
- 107) DTH, p. 115, l. 29 ; p. 117, l. 11 ; l. 16 (Lig myi dhya 異写字), 註106参照。
- 108) チベット的な称号のように思われる。TLT, II, pp. 446, 454, 467。
- 109) 「蘇毗」55頁参照。
- 110) 「蘇毗」57頁下段参照。
- 111) 「蘇毗」43頁, 註62参照。なお, cha, tsha についての修正意見は註22に示した。brañ についても註20参照。brañ は ḥbañs と同義で同根異字である。drañ と dañ の間にも同じ関係がある。
- 112) DTH, p. 15.
- 113) 「蘇毗」22—25頁, 41頁, 註47参照。同40頁, 註44で, 筆者は sToñ Lom ma tse の sToñ と sToñ pañi sde の sToñ とを無関係のように述べたが, 共に敦煌に駐留しているからには, Shañ shuñ の Dar pañi sde 「糸綿部落」と sToñ pañi sde とを切り離して考えるのは困難なように思われる。
- 114) CPT, p. 198.
- 115) 註22, 註111参照。
- 116) SML, pp. 24b—25a では Loñ ñam rTa ḥdzi となっている。

bañ so yul la btab/.....yul gyi miñ ni ḥPhyiñ yul Dar moḥi thañ/。

- 100) 註6, 註82参照。
- 101) GKT, f. 19a, l. 2; TGJ, f. 116b, l. 2; GGG, Ta, f. 197a, l. 3. 但し, 3本とも「六人の Legs」の最後に示されるものは, Zva gnam zin te と同じ根拠に基く名とすべきであろう。このことは, 「数」を充たす為に, そこにあり合わせた「副詞句」を或いは右に, 或いは左に転用したという事情を示している。
- 102) SRD, f. 118b, l. 1.
- 103) 接続辞 ste, te, de は説明を先立てるこもあれば, それを従えるこも可能である。最もありそうな場合を考えると, “Za rnam zin lde (SRD, f. 118b, l. 1) ste pru bo gnam gshuñ [du] brtsan” 「Za rnam zin lde にして, 化現せるもの, 中天の霸者」と読んだことであろう。
- 104) KGT, Ja, f. 8a, l. 2 には Dri gum btsan po の墓地とはしている(註82参照)が, Dar pa thañ のいわれを説明し, 尸体が Na ra ra (Da ra ra/Dar ra [/Dar ba] の誤写) と云ったからとしている。
- 105) 「蘇毗」55頁参照。
- 106) DTH, p. 13, 643 AD ; p. 15, 671 AD, “btsan mo sÑa mo steñs sÑa çur spuñs Rye rkyug la bag mar gçegs.....” 「皇女 sÑa mo steñs が sÑa çur の弟 Rye rkyug に嫁し.....」ともある。spuñs の用法については, ibid, 678AD に “Ra sañ rje spuñ Rye ryuñ” ともあり, khu を用いた例では, ibid. 677 AD に “Rye çiñ khu Bul bu” 「Rye çiñ の父方のおじ Bul bu」ともあり, 訳についての問題はない。これらから, 別に, Shañ shuñ (Lig, Khyuñ po, lCog la) 系の名称の特徴がうかがえる。この点からも, sÑa çur の名の他に, 固有の名称 Lig myi rhya を推測する理由が生れる。
- 107) DTH, p. 115, l. 29 ; p. 117, l. 11 ; l. 16 (Lig myi dhya 異写字), 註106参照。
- 108) チベット的な称号のように思われる。TLT, II, pp. 446, 454, 467。
- 109) 「蘇毗」55頁参照。
- 110) 「蘇毗」57頁下段参照。
- 111) 「蘇毗」43頁, 註62参照。なお, cha, tsha についての修正意見は註22に示した。brañ についても註20参照。brañ は ḥbañs と同義で同根異字である。drañ と dañ の間にも同じ関係がある。
- 112) DTH, p. 15.
- 113) 「蘇毗」22—25頁, 41頁, 註47参照。同40頁, 註44で, 筆者は sToñ Lom ma tse の sToñ と sToñ pañi sde の sToñ とを無関係のように述べたが, 共に敦煌に駐留しているからには, Shañ shuñ の Dar pañi sde 「糸綿部落」と sToñ pañi sde とを切り離して考えるのは困難なように思われる。
- 114) CPT, p. 198.
- 115) 註22, 註111参照。
- 116) SML, pp. 24b—25a では Loñ ñam rTa ḥdzi となっている。